

氏名（本籍）	小野 加奈子（茨城県）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第50号
学位授与年月日	令和5年9月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	母性看護学実習における看護学生の学びにつながる 実習指導者の足場かけ

学位審査委員

主査	茨城県立医療大学教授	博士（図書館情報学）	富田 美加
	茨城県立医療大学教授	博士（社会学）	才津 芳昭
	茨城県立医療大学教授	博士（医学）	中村 博文
	城西国際大学教授	博士（看護学）	宮澤 純子

論文の内容の要旨

【背景】

社会的構成主義では、学びを人や物との相互作用から構成される。看護が展開される「臨床」の場は、人と人との関わる「相互性」の場である。看護師養成教育の要とも言える臨地実習において、看護学生はリアルな患者や看護者と相互的に関わることによって、大きな学びを得ている。しかし、社会的構成主義の視点から看護学生の臨地での学びについて研究したものは少なく、さらに母性看護学実習に焦点をあてたものはない。

一方、臨地実習で看護学生の学びを支える存在として、実践を共にする実習指導者は重要であるが、指導者が学生に対してどのような支援をしているのか、「足場かけ」の概念を用いて具体的に記述しているものもない。

【目的】

本研究は、社会的構成主義の視点から、母性看護学実習における看護学生の学びを捉え、さらに、看護学生の学びにつながる実習指導者による足場かけの実践について明らかにし、看護基礎教育における臨地実習指導の発展の一助とすることを目的とする。

【方法】

第1研究では、母性看護学実習を履修した大学4年次の看護学生を対象にインタビュー調査を行い、正統的周辺参加の視点から母性看護学実習における看護学生の学びについて、「臨地の実践共同体への参加を通して人や物との相互的な関係性の中で生じる変

化」に視点をおいて質的に分析した。

第2研究では、母性看護学実習において看護学生の実習指導を担当している実習指導者を対象にインタビュー調査を行い、母性看護学実習における看護学生の学びにつながる実習指導者による足場かけの実際について、「学生との関わりの経験から実際に活かされている学生指導」に視点をおいて質的に分析した。

すべての研究は、茨城県立医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果及び考察】

第1研究では、看護学生9名からデータを得た。正統的周辺参加の視点からみた母性看護学実習における看護学生の学びは、43サブカテゴリーが導き出され、12カテゴリーから3コアカテゴリー【段階的な看護実践】【他者との関わりの中での成長】【現場で経験して得る感覚】が抽出された。母性看護学実習において看護学生は、看護者と共に看護を実践していく中で段階的に実践力を高め、正統的周辺参加の過程の中にいた。そして、学内では直接関わることのできない妊産褥婦や新生児、看護者などとの相互交流を通して、自己の成長を感じていた。さらに、分娩見学や新生児との関わりなど他領域では経験できないことから体感的に母性看護について学んでいた。

看護学生の学びは、学生が実践共同体の一員として受け入れられ、周辺参加から十全参加に向けての実践への参加が認められていることが重要であり、積極的に学生を実践に巻き込むような看護者の配慮が学生の学びのプロセスを促進させることにつながることを示唆された。

第2研究では、実習指導者20名からデータを得た。母性看護学実習における看護学生の学びにつながる実習指導者による足場かけの実際は、72コードが導き出され、23サブカテゴリーから9カテゴリー【学生の声を聴く】【学生の心が開くように関わる】【実践前後に確認する】【実践前後に助言する】【経験から思考を掘り下げる】【実践を促す】【学生集団へ働きかける】【人や場を調整する】【学生や自分の力量に合わせて対応する】が抽出され、さらに、コアカテゴリーとして、学生との信頼関係作りのためのアプローチ、学生の思考へのアプローチ、学生の行動へのアプローチ、実践の場へのアプローチの4つが、足場かけの具体的な支援方法として形成された。

母性看護学実習において、指導者は、学生との関係性を構築するために積極的に関わっていた。その関係性のなかで、実践の前後に学生へ確認と助言を繰り返し行い、実践後には経験を意味づける思考へのアプローチをしていた。実際の実践場面では、行動へのアプローチを積極的に行い、体験から現場への理解を促していた。また、指導者は、学生が関わる対象者や看護者との関係形成や、教員と連携して学生が実習しやすいように環境を整えることを通じて、実践の場へのアプローチも行っていた。さらに、実習での学びが深まるように、学生集団にも働きかけるようにしていた。これらは、指導者自身や学生の力量に応じた足場かけとして行われていた。

また、本研究参加の指導者は、分娩の立ち合いや新生児のケアなど、母性看護学実習でしか経験できないことを学生に積極的に参加させ、現場への理解を促すようにしており、そこには、母性看護という領域の特殊性を踏まえた足場かけがあることが示唆された。

【今後の課題】

今後の課題として、看護学生の学びと実習指導者による足場かけについて、母性看護学実習に特化した尺度の作成へと発展させるとともに、その実態について量的に把握するなど、より実情に即した課題を検討していくことも必要である。その上で、本研究で明らかとなった実習指導者が足場かけとして実践している4つのアプローチを柱とした研修プログラムを構築していくことも今後の課題であると考えられる。

【結語】

本研究では、母性看護学実習における看護学生の学びや実習指導者の学生への具体的支援となる足場かけについて質的に明らかにした。社会的構成主義の視点から捉えると、母性看護学実習における看護学生は、看護者と共に看護を実践していく中で段階的に実践力を高め、現場で出会う人との関わりの中で成長を実感し、現場で経験して得られる感覚から母性看護について学んでいた。さらに、看護学生の学びにつながる実習指導者による足場かけの実際には、学生との信頼関係作りのためのアプローチ、学生の思考へのアプローチ、学生の行動へのアプローチ、実践の場へのアプローチの4つのアプローチがあることが明らかとなった。

審査の結果の要旨

本研究は、母性看護学実習における看護学生の学びや臨地実習指導者による学生支援について、社会的構成主義の視点から、その構造を明らかにする質的研究である。

審査にあたっては、令和5年8月7日に最終試験を実施し、公開による発表及び質疑応答の後、学位審査委員4名による協議を行った。審査は、茨城県立医療大学大学院博士後期課程博士論文評価判定基準に基づいて行われた。

母性看護学実習では、新たな家族形成過程における複雑性から、学生が看護者として自身の役割を認識して主体的に実践することを支える実習指導には困難さがある。本研究では、実習指導者が学生の正統的周辺参加を支え、共に段階的に実践することにより、相互作用の中で母性看護学の学びを促進するという学生支援の構造を明らかにしている点において価値があるといえる。

第1研究では、正統的周辺参加から十全参加の方向に進む中で、まず学生が実践共同体の一員として受け入れられ、看護者と共に段階的に看護を実践し、実践力を高めていくという学びのプロセスを促進する構造を示した。さらに、第2研究では、学生の学びのプロセスを促進する実習指導者による「足場かけ」として、4つのアプローチを示し、学生が他者との相互作用から学ぶ上での指導者の役割を具体的に示した。また、本研究の結果に基づいて、当該研究課題に関する方法論や教育プログラムについて提言を試みていることから、看護学教育全体への貢献についても将来性が見込まれる。

しかしながら、本研究の根幹をなす「足場かけ」の概念について、先行研究における類似概念との差異が明確でなく、確固たる新規性や独自性を主張するためにはさらなる説明が必要である。第1研究及び第2研究において、それぞれの論理展開は適切である一方、両者の関連性が曖昧である。第1研究の「正統的周辺参加の視点で捉える学生の学び」と第2研究の「足場かけとなるような具体的な指導的関わり」とのつながりに関する考察が不足している。両研究を通して、効果的な学生支援の方法が明らかになった一方、それによる学びについてはプロセスにとどまっている。第2研究で示された足場かけの4つのアプローチによる学習支援の有用性について、総合考察で明確に示されることが望ましい。また、総合考察では、社会的構成主義の理論的基盤からの考察や教育学的な理論背景の言及等が十分ではなく、本研究で得られた結果の統合に向けた論理の深まりが必要であったといえる。

これら「足場かけ」に関する一連の記述が不十分であることは、研究者の理論的視座のゆれにつながり、論文全体としての論理一貫性に影響を及ぼしている。

また、研究参加者の属するコミュニティや調査時期等が異なることから、両研究の総合的俯瞰を行うことにはいささか無理があり、研究の妥当性には疑問が残る。

倫理的配慮については、茨城県立医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施され、必要な配慮が十分になされていると判断した。

以上をふまえ、学位審査委員全員の合意のもとに、博士論文として適切であることを認めた。